

宇輝人

VOL.66



旅するように移住。
生活と旅が
交差する場所に——。

川村 侑未 Kawamura Yumi

平成元年生まれ。静岡県掛川市出身。神戸大学卒業後、東京都で書籍や雑誌などの流通を担う日本出版販売(株)に就職。和文英訳した本の制作や国内の本を海外輸出する業務に携わる。現在はフリーランスの翻訳家として活動しながら小川町へ移住し、「小川のホステル イズミヤ」を経営。趣味は旅行で、これまで32カ国を旅した。

新たな息吹を吹き込む

かつて宿場町として栄えた面影が残る小川町商店街。熊本地震後は空き家や空き地が目立つようになったこの商店街の一角に、ひとときわにぎわいを見せる場所がある。古民家ゲストハウス「小川のホステル イズミヤ」だ。3月の開業には、多くの地域住民がお祝いに駆け付けた。経営者は川村侑未さん。昨年8月に静岡県から小川町へ越してきた。「古い物が好き。」と話す彼女は元の趣を残しながら、新しい価値を見出していく。

イズミヤは、築55年の元食堂「いずみ屋」を自らの手で改装。装飾部材は、熊本地震や7月豪雨の被災地から譲り受けた家具、近所や廃業した商店からの頂き物を活用。捨てられるはずだった物が壁や床、調度品として引き継がれ、時を重ねた記憶と共に空き家をよみがえらせた。大家の森田加代子さんは、「実家の食堂はみんなの集いの場でした。個性光るリノベーション

で、次の世代につながっていくんだと実感しましたね。」と顔をほころばせる。

移住につながった出会い

移住のきっかけは、全国各地にある家に定額で住めるサービスを提供するADDrèsを利用し、商店街にある宇城邸を訪れたこと。拠点として活用されている旧那須商店や隣接する国の登録有形文化財「風の館塩屋」の佇まいが気に入り、地域に暮らす人々の温かさに触れた。

「学生の頃から旅が好きで、旅先での出会いや受けた親切から、もてなす側にも興味を持って。ドイツへ行こうと考えていたのですが、コロナで渡航のめどが立たず……。そんな時に人々の優しさや街の雰囲気が残る小川でゲストハウスをしたいなど思うようになりました。昨年の6月に再度こちらを訪ねると、『実家、好きにしていよ』と森田さんがおっしゃるので、じゃあやってみようかと。」初めての来訪から一年もた

ずに移住を決めた。

地域を灯す光

人懐こく何事も楽しむ川村さん。出会えば自然と始まるご近所さんとの会話は、いつも笑顔が絶えない。採れたての野菜やおかずをおすそ分けしてもらったり、食事や誕生日会に招かれたりと、さらりと馴染んでいく。

「訪れた人と地域の人をつなきたいですね。宿泊客には長く滞在してもらって、熊本や小川を感じてほしい。この素晴らしいしは皆さんが一番ご存じです。し、皆さん自体が魅力ですから。」とほほ笑む川村さん。食事なしの素泊まりにしているのは、街へ出て出合いを楽しんでほしいという想いゆえ。翻訳家の顔も持つ彼女は、「アフターコロナは世界中からの旅人をもてなしたいですね。」と続けた。地域に溶け込み、生活を分かち合う彼女が橋渡しとなり、訪れた旅人はこの地を知っていく。彼女の存在は、新しい灯。この地を明るく照らす——。



ご近所さんとの弾む会話 商店街が好きな同世代の仲間と商店街活用も始めた

小川のホステル イズミヤ

住所は小川町小川16、小川阿蘇神社の隣。1泊3,000円。これまでに関東や関西から、自転車で日本横断中の20代やバイク旅の学生、地元出身の学生などが訪れている。

詳しくは、インスタグラムから。

[IZUMIYAHOSTELCRAWA](#)

近所の小学生に大人気の二人組が目印